

Camp

Data Book 2009



キャンプが子どもを育てます

キャンプは遊び。
でも、人生に必要なことが
たくさん学べる遊びです。



！ 自然そのものが もたらしてくれる学び

自然の環境は、人間の五感に働きかける不思議な刺激に満ちています。これらの刺激は、私たちの感動や驚き、知的好奇心や探究心を呼び起こします。そして実物に触れる経験は、「知識」を生きることに役立つ「知恵」として定着させることに役立ちます。

！ 自然の中での生活や活動が もたらしてくれる学び

自然の中での素朴な生活や活動は、向上心や想像力、環境保全や自然愛護への積極的な態度を育てます。また、キャンプで得ることのできる知識や技術は、危険を回避し安全を確保する能力、自らの安全は自らが守るという意識を高めます。

！ 集団による活動・共同生活が もたらしてくれる学び

キャンプの小グループでの生活や活動においては、一人ひとりが自主的・主体的に行動し、協調性のある態度や行動をとることが求められます。キャンプは、他者との深い交流の中で信頼感を育て、よりよい人間関係のあり方を学ぶ機会を提供してくれます。

！ 新しい体験が もたらしてくれる学び

キャンプでのふだん味わうことのできない新鮮な体験は、これまで気が付かなかった自分の長所や能力を発見し、短所を知る機会となります。そして、新たな興味・関心を引き起こし、生涯を通じた健全で豊かなライフスタイルの形成にも役立ちます。

キャンプの効果を高める環境とは？

生活・環境とキャンプの効果

キャンプでは自然環境を活用して、非日常的な生活を行います。どの程度自然を取り入れることが効果的なのでしょうか？

平成19年度の調査では、ほとんどのキャンプは自然が豊かなところで行われていました。しかし、宿泊の形態は様々で、宿舍中心が約55%となりました。また、食事の形態も様々で、全体としてスタッフからの提供がやや多めとなっていました。では、これらの違いとキャンプ効果との関係はどうでしょうか？

自然とのつながりを感じる環境

キャンプを行ったフィールドの「自然度」について、「民家や農地に近いが、自然に囲まれている」環境で行うキャンプの方が、「近くに民家はなく、非常に自然が豊富」な環境で行うキャンプよりも、効果が高くなりました（図1）。これは一見、自然が少ない方がいいようにも受け取れますが、「自然がほとんどない」環境や「自然が少ない」場合では、キャンプの効果はさほど高くありませんでした。「民家や農地に近いが、自然に囲まれている」、つまり里山のな、自然と人が共存している環境に身を置き、それらのつながりを体験することがよいでしょう。

宿泊形態・キャンプ期間中の天候

キャンプの宿泊形態については、「ほとんど宿舍泊」と「ほとんどテント泊」よりも、両方バランスよく行うキャンプの方が効果が高くなりました。食事については、提供される食事中心よりも、自炊を多く行った方が、自然とのつながり、思考・判断力により高い効果がありました。

また、キャンプ中の天候については、指導者の意図によって左右できるものではありませんが、調査の結果から見ると、穏やかな天候ばかりだったキャンプよりも、厳しい天候があったキャンプの方が効果が高くなりました（図2）。

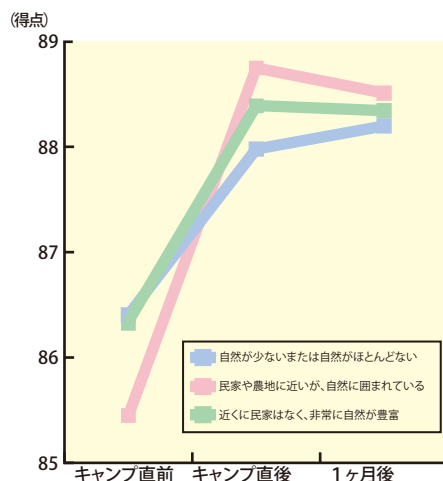


図1. 自然度とキャンプの効果

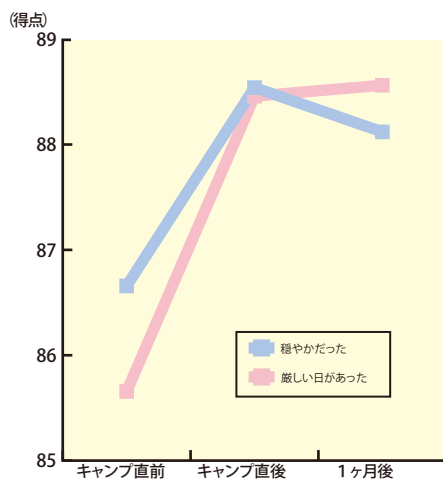


図2. 天候とキャンプの効果

キャンプ生活では、その非日常性や自然体験から多くのことを学びます。学習効果を高めるためには、ただ厳しさや、非日常性に我慢する体験だけではなく、バランスを考慮する必要がありますといえるでしょう。また、指導者の思惑通りに環境を整えることは難しいですが、それぞれの環境・状況を活用する目的やタイミングを考えたプログラミングや柔軟性が求められているのではないのでしょうか。

数字で見るキャンプ キャンプを支える施設数の変化

私たちが利用するキャンプ場や青少年教育施設の数はどうに推移しているのでしょうか？



公立の青少年教育施設の数はどうに推移しているのでしょうか？

図1、図2は公立青少年教育施設数の推移を表したものです。キャンプで利用する機会が多い「青年の家」や「少年自然の家」は、近年、減少傾向にあります。「野外活動センター」は「その他」に含まれますが、全体数の1割程度です。子どもたちの体験活動の充実を推し進める一方で、キャンプを実践できる場が少なくなっていることはとても残念なことです。

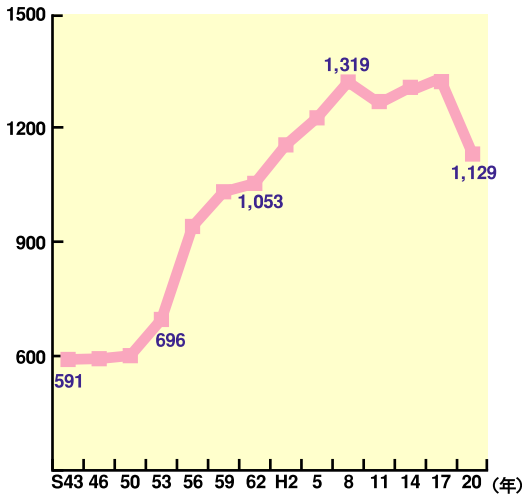


図1 公立青少年教育施設数の推移

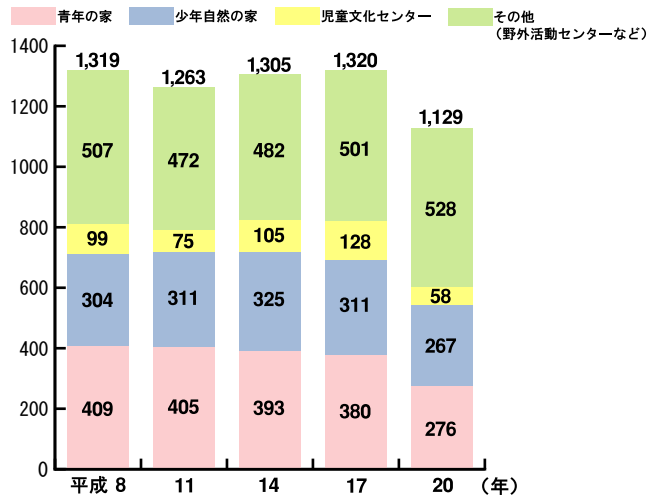


図2 公立青少年教育施設数の推移 (種類別)



キャンプ場の数はどうに推移しているのでしょうか？

図3、図4を見ると、公立・民間キャンプ場数の推移がわかります。調査開始時の数と昨年の数を比べるとどちらも増えていますが、最近10年間だけを見ると、公立キャンプ場は減少、民間キャンプ場は横ばいの状態が続いていることがわかります。

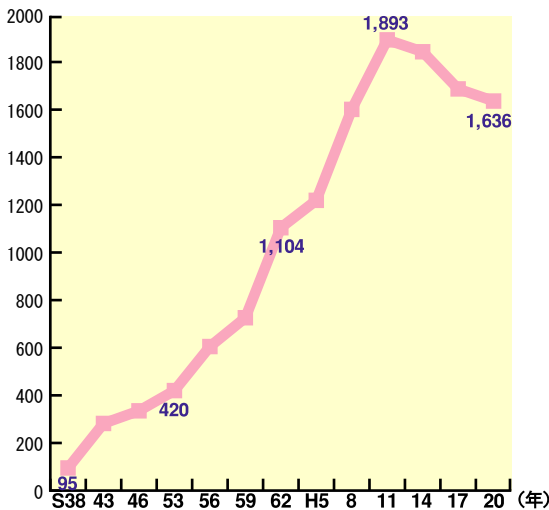


図3 公立のキャンプ場数の推移

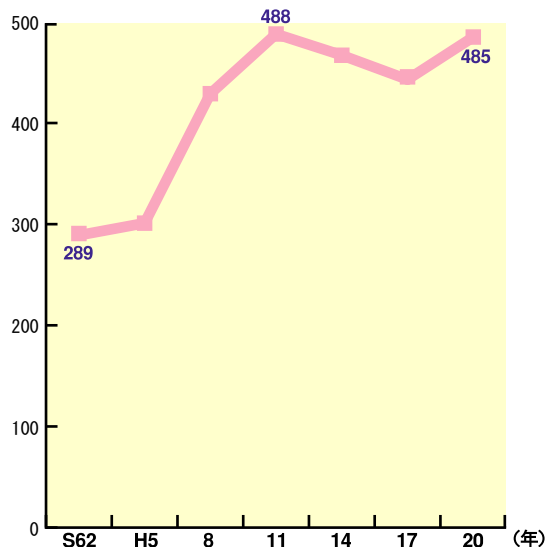


図4 民間のキャンプ場数の推移



「指定管理者制度」を導入した公立の青少年教育施設は どのくらいあるのでしょうか？

指定管理者制度導入後、まだ間もないため、平成17年と平成20年の調査結果しかありませんが、総施設数に占める割合を比較してみると、平成17年の16.7%に対し、平成20年は32.7%とほぼ倍増していることがわかります。現在も指定管理者の募集が増えていることを併せて考えると、指定管理者による施設の管理・運営は、今後も増えていくことが予想されます。

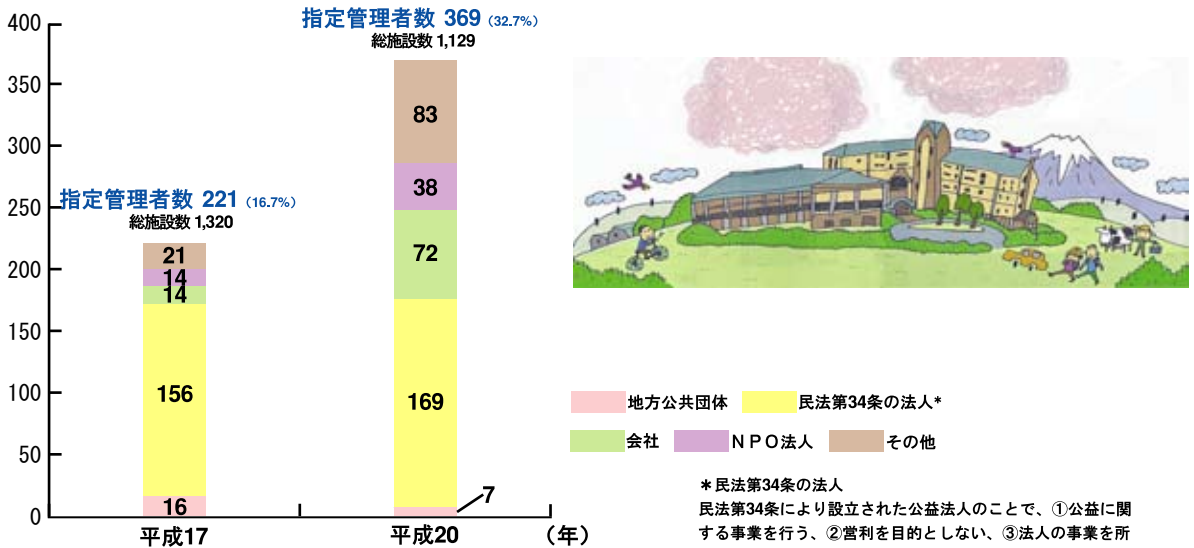


図5 指定管理者別の公立青少年教育施設数

指定管理者制度ってなに？

2003（平成15）年6月の地方自治法の一部改正に伴って公布、施行された「指定管理者制度」ですが、2006年9月に経過措置としての猶予期間が終わり、本格的に導入されるようになりました。この制度の特徴は、これまで地方公共団体が2分の1以上の出資を行う法人や公的な団体などにしかできなかった業務委託を、所定の手続きにより選定された株式会社やNPOなどのあらゆる団体に委託できるとしたところです。また、「指定管理者制度」のほかにも、PFI*(Private Finance Initiative)が導入されており、これらの制度による公共施設の運営は全国的な広がりを見せています。これら制度の対象となる公共施設には、青少年教育施設以外にも、保育所、図書館、体育館、コミュニティセンターといったさまざまな施設がありますので、みなさんが日頃から利用している公共施設にもこれに該当する施設があるのではないのでしょうか。

* 公共施設等の建設、維持管理、運営等を民間資金、経営能力および技術的能力を活用して行う手法

これから親となる若者の就労観、結婚観、子育て観に関する調査研究

この調査は、これから親となる若者（18歳から29歳）の「就労観」、「結婚観」、「子育て観」について、また、その若者が、就学前から高校までの各年齢期にどのような体験をし、その体験が現在の「就労観」、「結婚観」、「子育て観」にどのように影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が平成21年2月に実施したものです。

子どもは欲しい？

これから親となる現在の若者の「子どもが欲しい」という希望は、全体で80%を超えていることがわかります。一方で、「子どもは欲しくない」と回答した割合は、男性よりも女性が高く、年齢別では18～21歳の若い年齢で最も高いことがわかります。

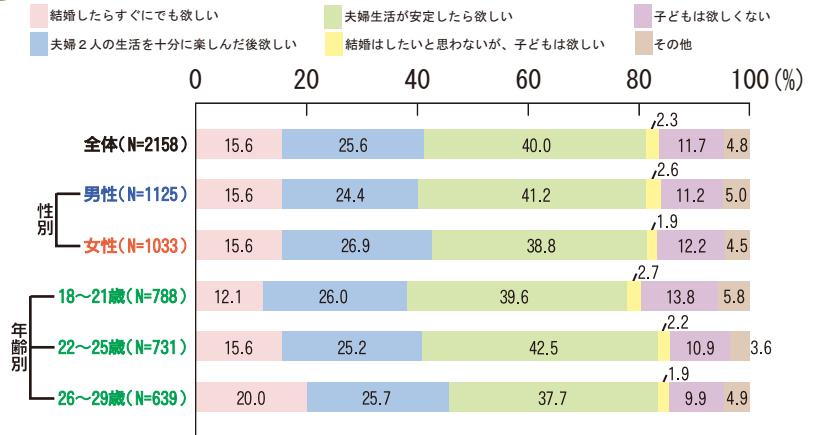


図1 子どもが欲しいという希望（全体・性別・年齢別）

これから親となる若者の子育て観は？

「子どもと一緒にスポーツをしたり、自然の中で遊んだりすること」を大切だと考えている若者は、全体で95%を超え、男性も女性も高い割合であるといえます。年齢別で見ると、年齢が上がるにつれて、大切だという思いは強くなっていることがわかります。

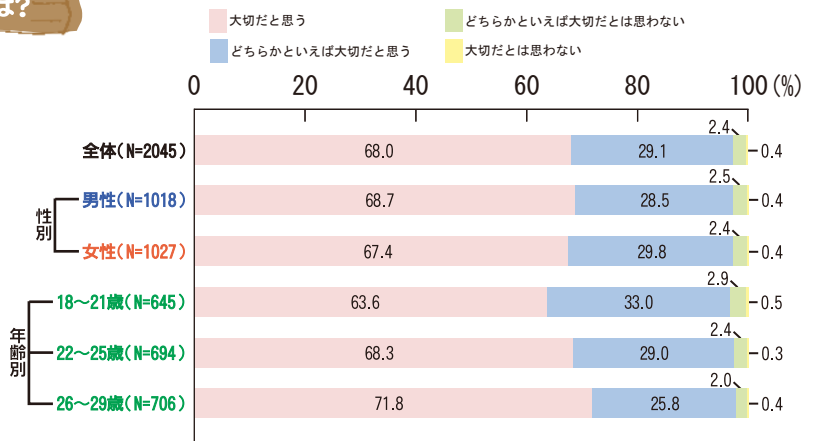


図2 子どもと一緒にスポーツしたり、自然の中で遊んだりすること

子どもにとって自然体験活動は大事？

これから子どもにさせたい体験活動として、「自然体験」が74.0%と最も高く、「国際交流体験」の52.5%、「集団宿泊体験」の49.7%、「奉仕体験」の38.8%、「農林水産業体験」の30.6%と続きます。

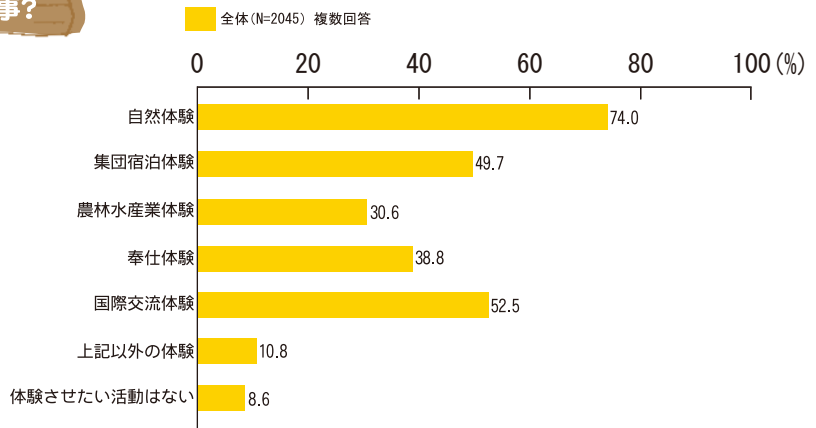


図3 これから子どもにさせたい体験活動

自分自身の体験はどうだった？

「家族と一緒にスポーツしたり、自然の中で遊んだりすること」(図4)や、「放課後や休日に、山や海、川などの自然の中で遊ぶこと」(図5)は、いずれも、就学前と小学校の時期をピークに、「よくした(よくあった)」、「少しした(少しあった)」を合わせて80%以上の高い割合となっていることがわかります。また、中学校でも55%、高校でも35%の割合を超え、中学や高校時期まで継続している傾向があるといえます。

図6の「同年代の仲間と一緒に共同生活すること」においても、小学校、中学校で、「よくした(よくあった)」、「少しした(少しあった)」を合わせて50%以上の割合となっています。

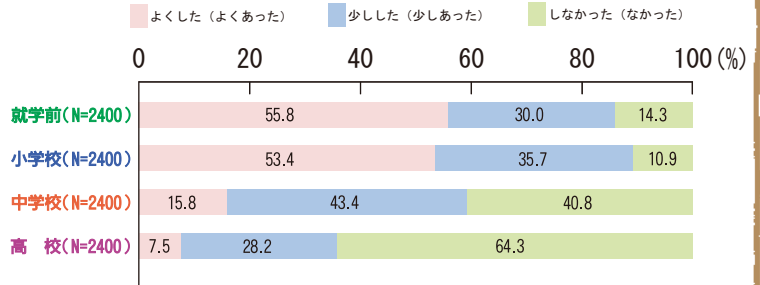


図4 家族と一緒にスポーツしたり、自然の中で遊んだりすること

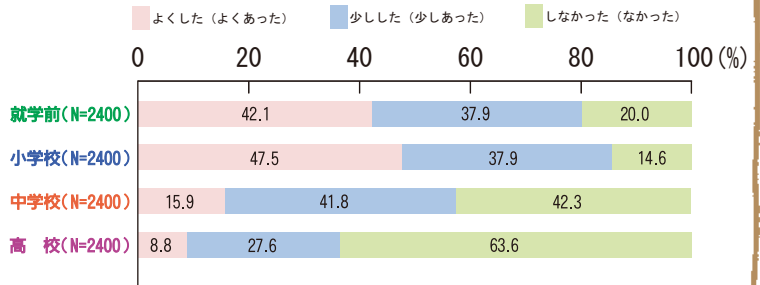


図5 放課後や休日に、山や海、川などの自然の中で遊ぶこと

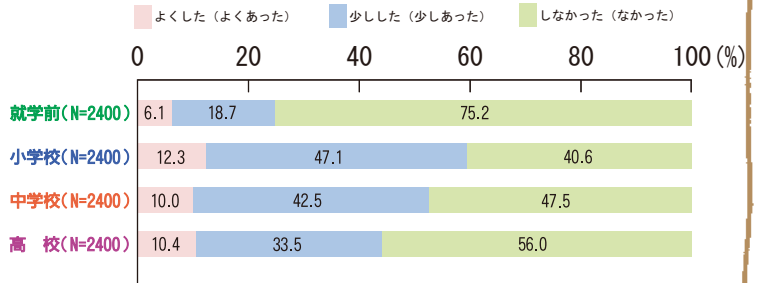


図6 同年代の仲間と一緒に共同生活すること

これらの調査結果から、現在の若者は、幼い頃から家族とスポーツをしたり、自然の中で遊んだり、仲間と一緒に過ごしたりと、充実した体験をしてきた人が多いことがわかります。これらの体験は、「子どもと一緒にスポーツをしたり、自然の中で遊んだりすること」(図2)という子育て観に影響を与えたり、これから子どもにさせたい体験活動(図3)の「集団宿泊体験」の高い割合の結果に影響を与えたと考えられます。一方で、現在の不安定な日本社会の中で、就職への不安、将来への不安、子育てに対する不安等が影響し、これまでの充実した体験がそのまま就労観、結婚観、子育て観に結びつけにくい現状があるのかもしれません。

幼い頃からの充実した体験が、その後の人生に活かせるような日本社会であってほしいですね。

キャンプ なるほど データ

キャンプは、自然環境、活動内容、指導者、仲間などのさまざまな影響を受けて、心身の成長や健康にとってもよい効果があることがわかってきました。そこで、いくつかの研究からわかってきた「なるほど」の発見について紹介します。

子どもの発達とキャンプの効果

それぞれの年代には「発達課題」と呼ばれる特徴が存在します。キャンプ指導者が、参加者の年齢に応じた特徴を知っているということは、参加者理解をする上で非常に大切なポイントです。発達の特徴に応じたキャンププログラムを提供することで、高い教育効果を生み出すことができます。そこで今回は、それぞれの年齢に対し、どれくらいキャンプの効果があるかを、これまで国内で行われたキャンプ研究をまとめ、発達段階別に比較しました。

研究の方法

この報告は、これまで国内で行われてきたキャンプに関する効果研究（316件）から集められたデータを、メタ分析という手法を用いて統合したものです。それぞれの研究では、それぞれの質問紙（尺度）が用いられていますが、それらを効果量（エフェクトサイズ）と呼ばれる数値に置き換えることで、同じ基準で比較することができますようになります。集められた効果量（エフェクトサイズ）は、“自己”に関する効果、“他者”に関する効果、“自然”に関する効果に分類し、（1）幼児・小学校低学年、（2）小学校高学年、（3）中学・高校生、（4）大学生、の間で比較しました。

“自己”に関する効果は幼児・小学校低学年と中学・高校生で大きい

“自己”に関する効果とは、自分に対する考え方や自己の能力の向上などを表します。年齢別に比較すると、幼児・小学校低学年と中学・高校生の年代において効果が大きかったことがわかりました。幼児期の子どもたちにとって、親元から離れて仲間と生活を共にするキャンプは、「自律性」や「自発性」が発達課題とされているこの時期の参加者の自己の変化に、大きな影響を与えていると考えられます。また、中学・高校生年代は、子ども時代の考え方から脱して、新たな自己を模索するなど、自我確立の前段階として変化の大きい重要な時期といわれています。そのような子どもたちにとって、キャンプ経験が新たな自己を再発見する機会となり、自分自身への考え方が大きく変化したのではないかと考えられます。

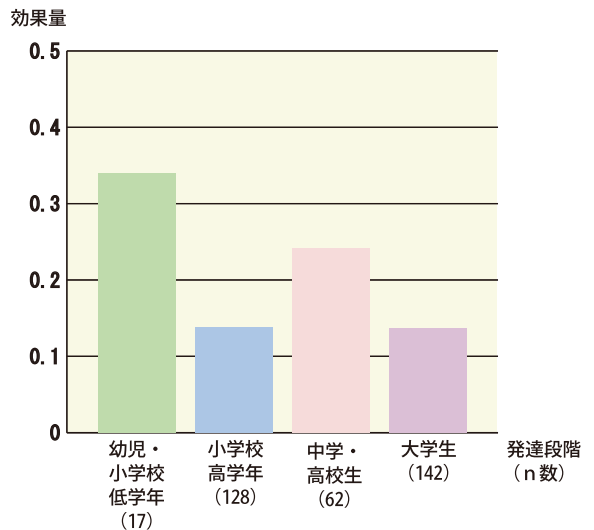


図1 発達段階別に見た「自己」に関する効果

“他者”に関する効果は小学校高学年と大学生が大きい

“他者”に関する効果とは、対人関係の変容や、社会性の発達などを表します。年齢別に比較した結果、小学校高学年と大学生が、中学・高校生よりも効果大きいということがわかりました。いままでの研究では、小学校高学年という時期は、これまで親との関係が中心だったのに比べ、仲間と過ごす時間が増加することが報告されています。そして、そのグループ集団の中で社会性をみにつけていくといわれています。また、大学生の友人関係の特徴として、友人と本音で話すことができ、互いに親密な関係を築くことができるようになるといわれています。このような年齢の特徴が、キャンプによる効果の大きさに影響を与えたと考えられます。

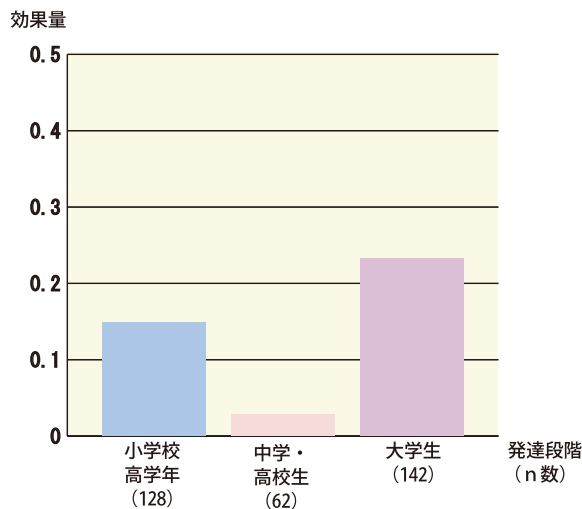


図2 発達段階別に見た「他者」に関する効果

“自然”に関する効果は青年期が高まりやすい

“自然”に関する効果とは、自然・環境に対する感情や認識の変容を表しています。年齢別に比較すると、中学生・高校生及び、大学生が幼児・小学校低学年よりも効果大きいという結果になりました。中学生から大学までの青年期は、これまでの学習体験を通じてより高度な考え方や思考ができるようになったり、環境へ関与していこうとする意識が高まったりします。そのため、キャンプを通して自然と触れ合うことで、より身近に自然を捉えることができるようになり、効果が大きくなったのではないかと考えられます。

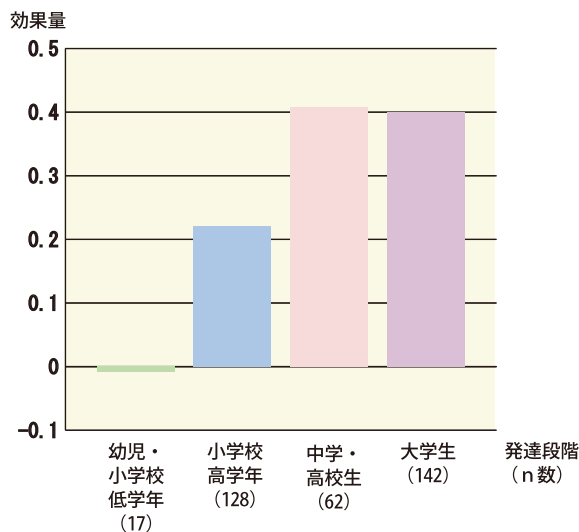


図3 発達段階別に見た「自然」に関する効果



ヒヤリ・ドキッ事件簿！

オフィシャルレポーターのみなさんに、キャンプ中に起きた「ヒヤリとした、ドキッとした」体験をお聞きし、2006年度から2008年度までの3年間の集計結果をまとめたものです。

❗ 「事故」と「ヒヤリ・ドキッ」はどのくらいの割合で発生しているのでしょうか？

ハインリッヒの法則*では、重大事故：軽傷：ヒヤリ・ドキッ体験は、1：29：300ですが、今回のアンケート結果（図1）では、およそ1：4：5といった結果になっています。もっと注意深く観察すると、軽傷：ヒヤリ・ドキッ体験はもっと多いのかもしれない。

* 1件の重大事故の陰に29件の小さな事故があり、さらにその奥に300件の小さな異常が隠れているという法則。

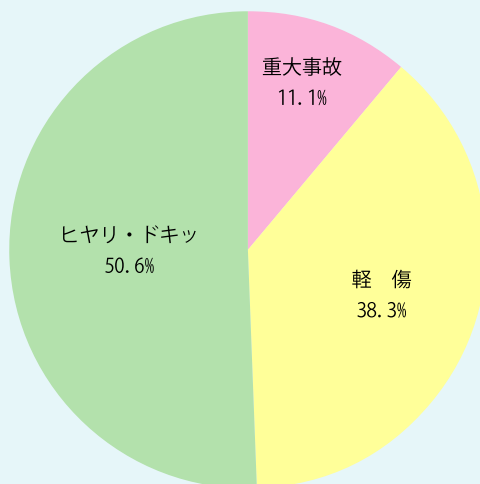


図1. 事故レベルの割合

❗ 被害者の内訳はどのようになっているのでしょうか？

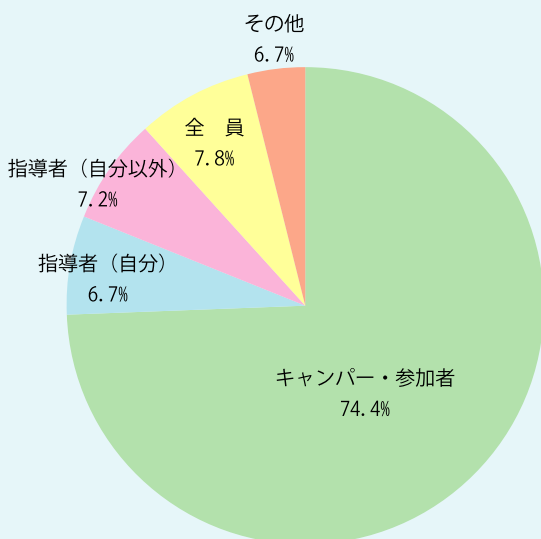


図2. 事故の被害者

もちろん現場にいる人の数を考慮する必要がありますが、図2の事故の被害者をみると、その多くが「キャンパー・参加者」です。指導者は、その経験や現場の状況が把握できているので危険にさらされることは少ないかもしれませんが、「キャンパー・参加者」の視点で、より一層キャンプの安全を考える必要があるようです。

～オフィシャル・レポーターアンケートより～

❗ 「事故」や「ヒヤリ・ドキッ」はどのような状況で発生しているのでしょうか？

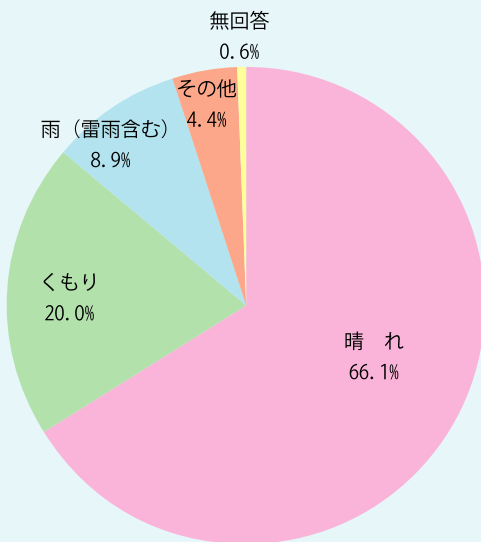


図3. 事故が起きたときの天気

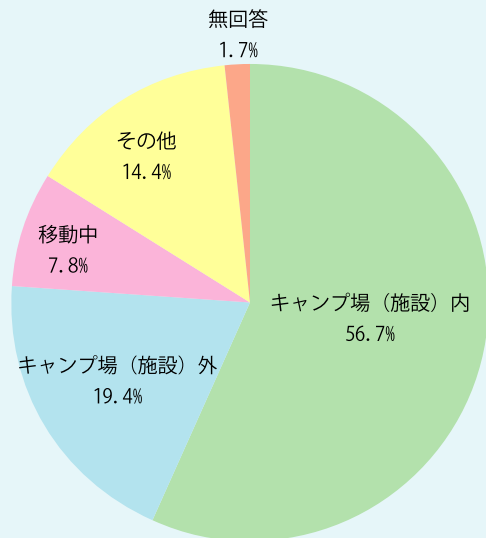


図4. 事故が起きた場所

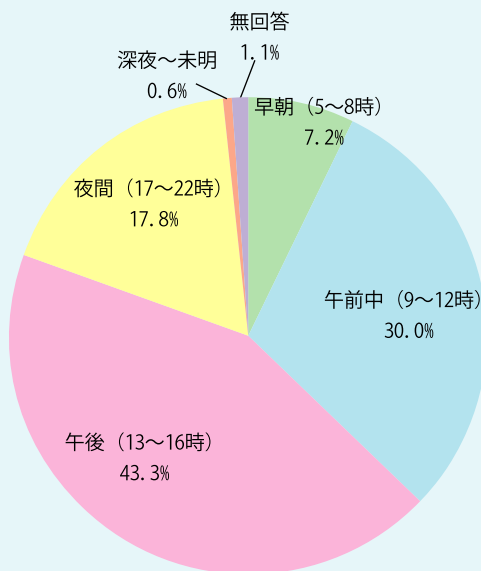


図5. 事故が起きた時間帯

図3は事故が起きたときの天気を、図4は事故が起きた場所を、図5は事故が起きた時間帯を示していますが、これらもちろん、活動の多くが「晴れた」天候のもとで行われ、活動の多くがキャンプ場内で、そして、午後に行われたと考えれば、一概に事故は「晴れた日に、キャンプ場内で午後に多く起きている」と結論づけることはできません。しかし、この結果から、事故はどんな天候でも、どんな場所でも、どんな時間帯にも起きていることが確認できます。「雨だから大丈夫、室内だから大丈夫、また、早朝だから大丈夫」などといった思い込みをしてはいけないということを再認識させてくれる結果となっています。

オフィシャル・レポーターとは。。。。

日本キャンプ協会の事業や刊行物について、定期的にご意見を寄せてくださる会員の方々です。協会事務局より送付するアンケートに答えていただき、その声を協会の各種事業に反映しています。都道府県協会推薦の会員と自ら応募した会員、約200名で構成されています。

あなたのキャンプはどんなキャンプ？

今後、需要が高まりそうなキャンプはどんなキャンプ？

オフィシャル・レポーターのみなさんに、この1年間（2008年10月～2009年9月）に、スタッフとして参加したキャンプの概要をうかがいました。

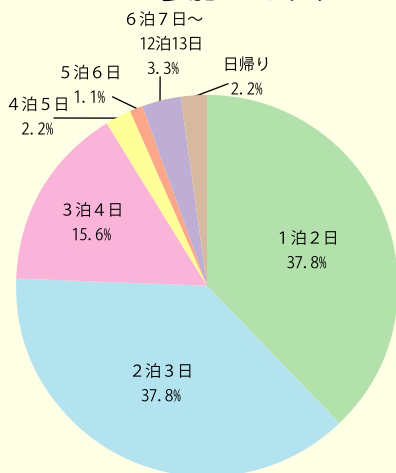


図1. 実施期間

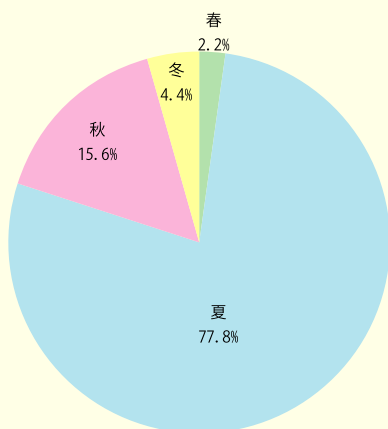


図2. 実施時期

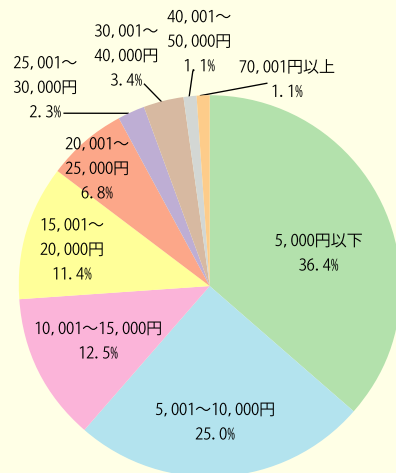


図3. 費用

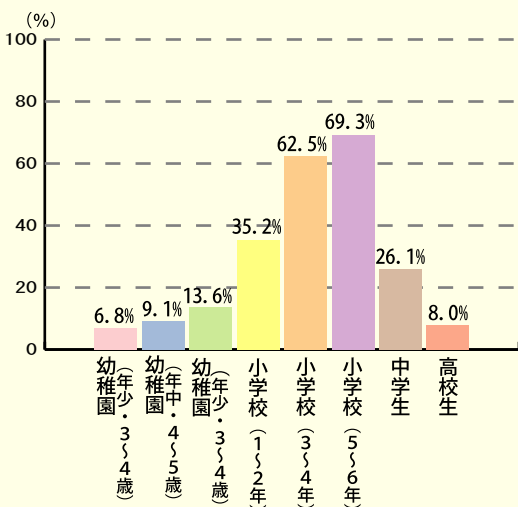


図4. 対象

表2. キャンプ中の主な活動

1	生活体験活動…里山もしくは野外での衣食住に関連する生活実践を行う活動 (例：テント泊、火おこし、食事作り、農業体験、山村民泊など)	69.8%
2	野外炊事活動…野外生活の一部というよりも、野外炊事そのものに力点を置いた活動 (例：アウトドアクッキング、夕食コンテストなど)	45.3%
3	レクリエーション活動…参加者の交流、交歓を目的としたゲーム、ダンス、ソングなどの活動 (例：キャンプファイアー、仲間作りゲームなど)	44.2%
4	アウトドアスポーツ活動…身体的・スポーツ的要素を伴う野外活動 (例：ハイキング、マウンテンバイク、カヌー、沢遊び、海水浴など)	43.0%
5	環境学習活動…自然や環境について学習もしくは体験することに力点を置いた活動 (例：野鳥観察、田んぼの生物調査、ネイチャーゲームなど)	24.4%
6	創作活動…造形活動、創作活動そのものに力点を置いた活動 (例：ネイチャークラフト、草木染めなど)	17.4%
7	選択活動…参加者自ら計画もしくは選択して行う活動 (例：個人別選択活動、自主企画活動、自由時間など)	12.8%
8	地域学習活動…地元の伝統文化や歴史にふれたり、地域での奉仕活動を行ったりする活動 (例：周辺地域のマップ作り、地域の民話、伝承遊びなど)	10.5%

表1. キャンプを通して伝えたいこと

1	活動の楽しみや感動体験	69.2%
2	集団における協調性や責任感	65.9%
3	自然への興味関心や環境保護への意識	41.8%
4	成功体験による発達・成長	31.9%
5	行動力や自主性	22.0%
6	個性や能力の発揮	19.8%
7	問題解決力や判断力	15.4%
8	活動や文化に関する知識や技術	8.8%

図1は「実施期間」についての質問です。実際に参加されたキャンプは、圧倒的に「1泊・2泊」の回答が多いのですが、今後需要が高まると考えているキャンプ(図5)は、「3泊・4泊」の回答が多くなっています。小学校の長期集団宿泊活動が推進され始めた影響などから、今後キャンプの実施期間が長くなると予測されている方が多いのではないかと考えられます。このことと関連していると思われませんが、今後需要が高まると考えているキャンプの「費用」(図7)を見ると、実際に参加されているキャンプに比較して、「5,000円以下」が減少し、「5,001円～15,000円」という回答が増えています。

次に図4を見ると、実際のキャンプにおいては幼児や小学校低

～オフィシャル・レポーターアンケートより～

また、今後、需要が高まりそうなキャンプについてもうかがいました。

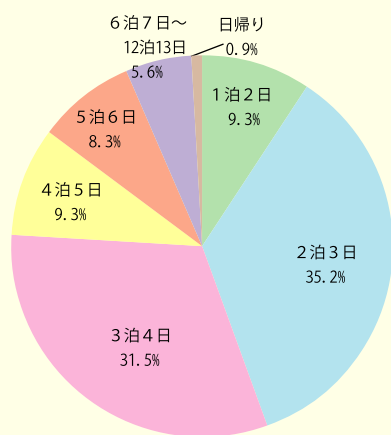


図5. 実施期間

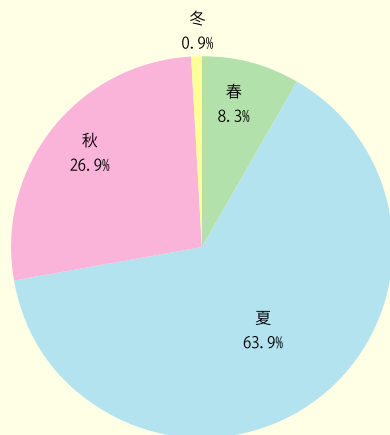


図6. 実施時期

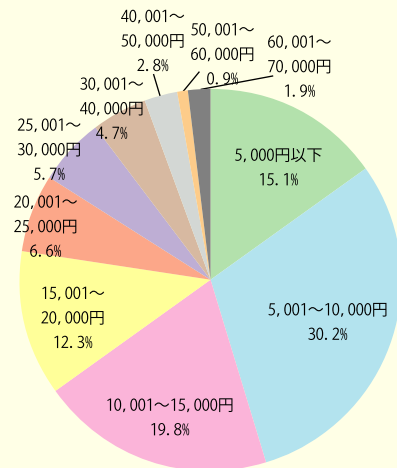


図7. 費用

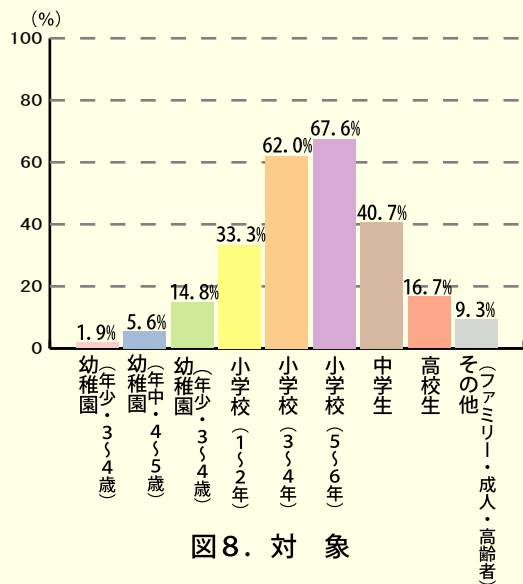


図8. 対象

学年の子どもを対象としている方が多いことに驚きます。「森のようちえん」*をはじめとする低年齢の子どもの自然体験活動が各地で展開されていることなどが反映しているのでしょうか。また、今後のキャンプで、「中学生・高校生」という回答が多くなっていることも特徴的です。中1ギャップなど、中・高校生の人間関係能力の低下が問題視されています。こうした思春期の子どもたちを対象としたキャンプの教育的な効果は、今後さらに期待されていくものと考えられます。

* 森のようちえんは、<http://www.morinoyouchien.org/>を参照。

表3. キャンプを通して伝えたいこと

1	活動の楽しみや感動体験	64.5%
2	集団における協調性や責任感	58.9%
3	自然への興味関心や環境保護への意識	56.1%
4	成功体験による発達・成長	33.6%
5	問題解決力や判断力	22.4%
6	行動力や自主性	21.5%
7	個性や能力の発揮	15.0%
8	活動や文化に関する知識や技術	12.1%

表4. キャンプ中の主な活動

1	生活体験活動…里山もしくは野外での衣食住に関連する生活実践を行う活動 (例: テント泊、火おこし、食事作り、農業体験、山村民泊など)	83.0%
2	環境学習活動…自然や環境について学習もしくは体験することに力点を置いた活動 (例: 野鳥観察、田んぼの生物調査、リバーゲームなど)	42.5%
3	野外炊事活動…野外生活の一部というよりも、野外炊事そのものに力点を置いた活動 (例: アウトドアクッキング、夕食コンテストなど)	39.6%
4	アウトドアスポーツ活動…身体的・スポーツ的要素を伴う野外活動 (例: ハイキング、マウンテンバイク、カヌー、沢遊び、海水浴など)	38.7%
5	レクリエーション活動…参加者の交流、交歓を目的としたゲーム、ダンス、ソングなどの活動 (例: キャンプファイア、仲間作りゲームなど)	35.8%
6	選択活動…参加者自ら計画もしくは選択して行う活動 (例: 個人別選択活動、自主企画活動、自由時間など)	20.8%
7	創作活動…造形活動、創作活動そのものに力点を置いた活動 (例: ネイチャークラフト、草木染めなど)	16.0%
8	地域学習活動…地元の伝統文化や歴史にふれたり、地域での奉仕活動を行ったりする活動 (例: 周辺地域のマップ作り、地域の民話、伝承遊びなど)	9.4%

注: 表1～4は複数回答。

良いキャンプには良い指導者が必要です

日本キャンプ協会ではキャンプ指導者の養成をしています。それは、質の高い自然体験のためには、良い指導者が不可欠だからです。資格を持っている指導者は全国に約1万9千人。全国の様々なアウトドアシーンでキャンプ指導者が活躍しています。



全国のキャンプ場数
2,121カ所

平成20年度社会教育調査より

全国のキャンプ人口は510万人+α

オートキャンプ人口(510万人)に、学校や社会教育団体で行われている自然体験活動の参加者を加えたものをキャンプ人口ととらえます。まだ正確な数字を得ていません。(レジャー白書2009より)

都道府県別指導者数

ベスト5

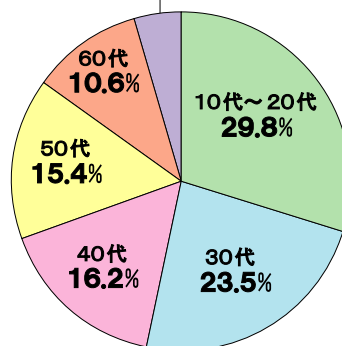
1. 東京都 **5,495** 名
2. 埼玉県 **1,450** 名
3. 愛知県 **1,293** 名
4. 大阪府 **1,090** 名
5. 神奈川県 **936** 名

1県あたり平均 **412** 名

※ 各県協会に所属する指導者数を表しています

指導者の年齢構成

70代以上 4.5%

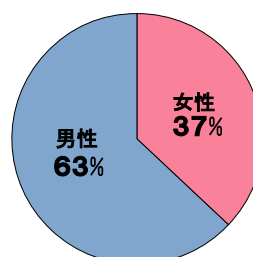


資格別会員数

- キャンプディレクター1級 **1,120** 名
- キャンプディレクター2級 **2,308** 名
- キャンプインストラクター **15,536** 名
- 合計** **18,964** 名

※ キャンプインストラクターは20時間、ディレクター2級は80時間、ディレクター1級は160時間の学習内容を修了した指導者です。

登録指導者の男女比



(2010年3月現在)

キャンプインフォメーションセンターから

社団法人日本キャンプ協会では、キャンプのことなら何でも相談に応じる「キャンプインフォメーションセンター」を開設しています。2009年の相談実績から、キャンプの傾向を見てみましょう。

2009年4月から2010年3月の相談実績

相談内容のベスト5

- | | |
|---|-----|
| ① プログラムの相談 情報提供 | 20% |
| <small>(キャンプの企画・運営についてのアドバイス、アウトドアでのゲームやキャンプファイアーについて、安全管理、野外生活技術について、資料請求など)</small> | |
| ① キャンプ場紹介 | 20% |
| <small>(個人の条件に合ったキャンプ場、団体でのプログラムができるキャンプ場など)</small> | |
| ① 指導者紹介 | 20% |
| <small>(学校や地域キャンプの企画・運営、キャンプファイアー指導、アウトドアスキル講習会等の講師など)</small> | |
| ④ 取材・出演依頼 | 9% |
| <small>(連休・長期休暇に向けたアウトドア特集や安全特集の取材、アウトドアスキルの指導・助言のためのテレビ出演など)</small> | |
| ⑤ キャンプ紹介 | 6% |
| <small>(子どもが参加できるキャンプ、スキーのプログラムや団体を紹介)</small> | |
| * その他 | 25% |
| <small>(資格や事業に関する問い合わせ、協会HP・発行物等に関する問い合わせなど)</small> | |

「プログラムの相談 情報提供」「キャンプ場紹介」「指導者紹介」といったキャンプに関する一般的な問い合わせを、「指導者資格」「事業情報」「協会発行物」といった協会に関係する問い合わせが上回りました。協会HPのアクセス数にも見られるように、日本キャンプ協会に注目が集まるようになった現れの一端と見るのではないでしょうか。

■ キャンプインフォメーションセンターへのお問い合わせは

Eメールで info@camping.or.jp

電話で 03-3469-0233 (月～金/10:00～18:00)

FAXで 03-3469-0504

手紙で 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
国立オリンピック記念青少年総合センター内

専門のコーディネーターがお答えいたします。

Camp Data Book 2009

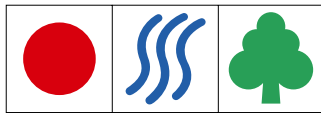
2010年3月31日発行

編集 社団法人日本キャンプ協会 調査研究委員会

平野吉直 岡村泰斗 甲斐知彦 月橋春美 永吉英記 林綾子 戸室勇児

発行者 野澤巖

発行所 社団法人日本キャンプ協会 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1 国立青少年センター内
TEL: 03-3469-0217 FAX: 03-3469-0504
E-mail: ncaj@camping.or.jp URL: <http://www.camping.or.jp>



NCAJ

National Camping Association of Japan